

幼児教育者のみなさんへ

——周郷博先生の最後の講演から——



赤間峰子

周郷先生がなくなられたのは今年の二月二十八日です。そしてこの講演は二月十六日に、今まで何度か先生が講演をなさった。お茶の水幼稚園の遊戯室でなされたものです。私は、この講演を直接に伺えなかった者の一人として、できるだけ多くの方たちにこの「最後の講演」というより先生の「最後の叫び」をお伝えしたいと思って、くり返しくり返し録音を聞きました。そして先生の気魄には、

亡くなられたとはとても思えないような……一方では最後であったからこそ……と両極端の思いをしながら文字にしました。私にとっても、本当に最後の仕事なのだ、といいきかせながら……。

◆「春が来た」の世界

この講演はまず一同に「春が来た」を歌ってほしいと先生がいわれて、一同が合唱するところから始まります。そして

先生が中国へいらした時に、今の日本の子どもには見られないような、素直ない顔をした中国の子どもたちが、この歌を歌ってくれたとなつかしそうに話されます。

僕が最初にその歌を歌ってほしいといったのは、日本人が持っていたはずの自然との親しみ深いつながり、そのつながりのおかげで昔の日本人がもっていた感性を、あな

た方の感じる心の中で蘇えらせてほしいと思うから、最初にまず歌ってもらったんです。そして、そのところを抜きにしてしまったんでは、僕の話していることはうろですよ、ただの理屈です。

このあとに具体的に出てきますが、「感性」という言葉は世界中共通の言葉かもしれないけれども、特に日本には、どの国にもない独特な感性があったはずなのに、戦後三十五年間にこのわれわれの感性がポロポロになったと先生は嘆かれます。そして感性の生きていない人には何をいつてもしょうがない、といわれ、重ねて「これわかりますか」と念を押されています。

この講演には実にたくさん、この「わかりますか？」が出てきます。時にはちょっと笑いながら、時にはふりしぼるように……。そのたびに私は、まだ先生は

生きていらっしやる、と思いました。この二月十六日はまだ春とは名のみ寒さでしたが「みんなは春を本当に感じてますか？」とまた念を押されて、ご自分で「興奮してくたびれた」また「若い人は興奮してもくたびれないはずなのに（このごろは）くたびれて？ いやだな」といわれます。

そして、年をとって醜くなる「老醜」ということは、自然にまかせておけばそうなるのがあたりまえで、だからこそ人間は、一生懸命に生きて、老醜にならないように年をとらなければいけない。若いうちから老醜にならないよう、人間の魂の若さをずっともたせていこう、これが教育の基本的なものだといわれます。

そして「今の日本の教育はそれとは反対のことをやっている」と。

昔は実際に「春が来た」の歌のような世界があって、そこにわれわれの心もあ

って、本当に春を感じていた日本人がいたと、実朝の歌、山部赤人の歌などを心をこめて詠じ、先生独特の説明をなされます。次に、

子どもの時までもっていた生き生きとした眼差^{まじ}しでね、自分だけでなく、世界のいろんな人たちの悲しみがわかるように、真理というのは何であるかということに、本当に洞察力をもって見る心を、初めはもっていた。それがこわれてしまわないように、老醜におちいるのをさけて、人間らしい若さ、人間らしい知性、人間らしい感情をこわさないように育てておこうというのが、僕は教育だと思えますね。

教育を本気で考える人の心の中に、この線がなかったら、それは教育とはいえないとまでいわれます。

◆私は何のために

生きてきたか

つづいてパートランド・ラッセルの自叙伝のまえがき——私は何のために生きてきたか——を読んで下さいます。

『私の人生を支配してきたのは、単純ではあるが、圧倒的に強い三つの情熱である。愛への熱望、知識の探求、それから人類の苦悩を見るにしのびず、そのためにそぞろ無限の同情である。こうした情熱が、ちようど大風のように私をこきしこきとばした——気のおもむくままに、深い苦悶の大海を越え、絶望の岸へと吹き寄せた……』

最初私は愛を求めた。なぜならばそれは陶酔をもたらすからである——その喜びがあまりに大きいのでしばしば私は、二、三時間、この狂喜のために以後の全人生を犠牲に供しようとしたほどである。

次に愛を求めたのは、愛は寂寥を救ってくれるからである——すなわち、意識もたえだえにおのひいて、世界の果ての冷たい

底知れぬ、いのちなき深淵をのぞく恐しい寂寥である。最後に私が愛を求めたのは、愛の結びつきうちに、その小さな神秘の世界のうちに、聖人や詩人が想像してきたところの、そして自分もつとに胸にえがいたところの天国のヴィジョンを現実に見たからである。これこそが私が求めたところのものである。そしてこれこそが、人生にとってあまりに良すぎるように思われるけれども、とうとう私が発見したところのものなのである。

それと同様の情熱をもって私は知識を探求した。私は人間の心を理解したいと願ってきた。星はなぜ輝くのかを知りたいと望んだ。そして私は、数が流転を支配するというピタゴラス学説の威力を理解すべく努力してきた。そのいくらかを——ほん

の少しではあるけれども、私はなしとげた。

愛と知識は、その可能な限りでは、高く天国に達した。しかしいつも憐憫の情が私を地上に引き戻した。苦悶の叫びが反響して、私の胸にひびくのである。飢えに泣く子どもたち、圧倒者に苦しめられる犠牲者たち、息子から重荷として養われるよるべのなき老人たちや、それから孤独と貧困と苦痛の世界全体か、人生というものがどのようなものであるべきかということ、冷然と愚弄するかのよう、社会の現実として現存しているのである。私はこの社会悪を減らしたいと切望する。しかし私にはできない。そして私もまた苦悶する。これが今日までの私の人生である。

私は、この人生を生きるに値する人生だと思っている。そうして、もしもチャンスが与えられるならば、もう一度喜んでこの人生を生きようと思う。』

これだけの文章を、先生は一気に読まれたわけではなく、そこかしこに感情をこめた独特の解釈をはさんで話されています。愛が陶醉をもたらすのは、人生が辛いからだ、

だって人生は辛いことがあるに決っている。愛でもなければどうして、この辛いような人生の問題に耐えて、そこから逃げたしまったりしないで、その辛い経験から、真珠のように美しい心を、美しい詩をそこから書くなんてことはできないんじゃないか。

この愛というのは、なかなかちょっと説明がつかないですよ。学問するということが、愛ですよ。損得で学問してるのなんて、ろくな学問じゃない。詩を書くんですけど、東山さんが絵を画くのも愛ですよ。

次の、知識について、knowledgeと

いう名詞でいうような死んでいる知識でなく、人間が知りたいと思ひ、その知りたいことを求める働き *knowing* だと説明されます。

三番目の「愛と知識は……」以下を非常に強調され、殊に最後の「もう一度生れてきてもいい」というところは、

実にいいね。九十何歳になってこういう文章が書けるって、立派だなあ。年とってないね。もう一度生れてきてもいいんだ。この人生を愛しているから。というのは人間を愛しているから、地球上に生まれた人間という生きものを愛しているから。

と生き生きと話されています。私にはバートランド・ラッセルの言葉というよりも、周郷先生自身の言葉にきこえます。このあと中座した方があって、先生はとても悲しそうに、その方が先生のお

話に不満だったのだろうと言われますが、実際は気分が悪いために中座されたとのことで、このことを先生にお伝えできなかつたのが残念だと思ひます。

それから先生は、自分が今どういうふうに生きていかうかということをお話されます。ご承知のように、先生は非常に人間を愛された方ですが、その対象の国際的であることに今さらのように驚かされます。たまたまニューヨークの International Center for the Integrated Studies (総合化された研究のための国際センター)からの手紙に、現在世界的に問題となっている、人類の滅亡にまでつながるようないろいろなできごとに対して、やはり愛というものについて訴えてきていると、再び話を愛に戻されます。

この状態ね、これを僕もそう感じてきたけれども ways and power of love 愛とい

うもののやり方というか、愛というものが
どういう働きをしているかが、いろんなや
り方^{method}で複数になっています。そして
愛の力というのはどういうものであるかと
いうこのことを中心にして、つまり人類全
体が愛というものをもっとすがすがしい形
で持ち直そうじゃないかというのが、手紙
で訴えてきている問題なんです。それ
は、幼児教育とか大学教育とかと関係ない
みたいに思われちゃ、困るんですね。愛と
はなんですか。愛には *love* のやり方と
いうものがある。愛なんて売りのものにはな
らない。愛つてものはわからないもので
す。自分でもわからない。

と、大きな問いをなげかけて下さいま
す。そして、ある所へ講演にいらした
時、その園長室に「神は愛なり」とい
う額がかかっていたけれど、こういう言
葉を宣伝文句のようにしたり、わかった

ような気になって甘ったれるのは困る
と、また愛の話がつつきます。

生きていくということは、愛がなければ
生きてはおれないんです。……(中略)……
愛があつて、一人の人間は生きてい
るんです。愛がなければ、いくらいいお医者さん
でもだめです。薬なんか飲めば飲むほどだ
めです。愛というのは、不思議な生きる力
です。自分でそれを感じなければいけません
。だから生きてるんですよ。誰からも
らわなくてもいいんです。

それは、植物やなんかでも、みんなそう
ね、猫でも犬でもそう。猫になって、犬に
なつて、ちゃんと生きてるだろう。あれは
祖先からずっと来て、猫の種族を守るよう
に、たとえ野良猫といえども、一匹の野良
猫のなかに猫の祖先からきているものがあ
つて、これを受けて愛によって生まれた生
命の流れを受けとめて、野良猫が一匹、生

きているわけです。われわれも同じです
よ。

◆「十分の一」と「十分の九」

次に、もうひとつ、バートランド・ラ
ッセルの著書『人類に未来はあるか』の
中の「十分の一」と「十分の九」の話を
されます。これは、人間が遺伝的にうけ
ついでいるものは十分の一で、あとの十
分の九は、五千年ぐらい前から人間が畑
を耕したり、言葉を使ったり、動物を飼
育したりして歴史が始まり、そのあと、
水車を作ったり、馬に農耕をさせたりと
いう歴史的文化的なもの。この十分の一
と十分の九で、人間というものができ上
がっているということだと説明されま
す。そしてこれらの歴史的文化的なもの
は教育も含めて、十分の一である遺伝的
なもの(体)に対して働きかけている。

父母からうけついできたものをだめにしてしまうのが、あなたの不幸の始まり、今では体までだめになっちゃってる。ラッセルは、それ(体)を十分の一だといっている。

あとの十分の九が変に間違っただけに大きくなってきて、十分の一の子どもの体に十分の九を押し込むから、それで人間の子どもの体をだめにしちゃまっている。昔のことっていうわけじゃないよ、体ですよ問題は。教育が、なんていうけれど、体がだめになっちゃったんじゃないですか。人間がもっている、何十年前か前にすでに完成していたこの貴重な財産を、こわしちゃったんじゃないか。頭で覚えなさいなんてことばかりでいいんですか。頭は覚えるようにできているんです。

先生がどんなに子どもの側に立ってやさしく見ておれたかということが伝わってきます。そして同じような考えをもっ

ている「アルベール・トリス」というフランス人の本を訳されて、一九五二年にその人をお訪ねになったと、その彼の本の中から話されます。

僕は戦争に負けた直後に、フランスの年とった人の、幼児とか赤ん坊をどう育てるかという本を訳しました。その時、一九五二年にパリに行つて、そのアルベール・トリスという人を訪ねたけれども、いいおじいさんでね、僕はバラの花を持って行った。ストライキで乗り物がなにもないものだから、ずっとセーヌ川を渡つて、アパートの七階かにいる彼を訪ねた。彼の本の中で、いま本当にそのことを気がつかなければならぬところへきたもんだから(こんどはフランス語ですが)「ビアン・フェール Bien faire よく何かがやれるということ(体で)、それがもつて、よく考える」という人間になるんですね。『ビアン・フ

エールが土台になって、ビアン・パンセ Bien pensee よく考えることを導き出す』という言葉があるんですね。

子どもは小さい時は、おとなが考えるようには考えてない。なんかこう、やっているのね。季節が来たね、草を摘んだね、花を……ね。体で学んでる、つまりビアン・フェールです。何かができるようになるということが、体の幸せですね。たらふく食つて寝ているというのは、幸せなんかじゃないんだね。体が幸せになる、体が喜びを感じる時がないんですね。寝ちゃつてるんですね、考えないでね。ビアン・パンセなんてできません。悪い子ばかりだね、多いですよこのごろは、六年生がある日ね、あんなおばあちゃんを殺しちゃうんだから……。体が変わんだ。この変な体に悪知恵だけが吹きこまれてくるんだから、これがどうして、よく考える人間になりますか。ラッセルのいった「十分の一」は、人間の

基じやないか、体は。

ここに、ラッセルの自伝が二冊あるんですが、幼児の時代、おとなが想像する以上子どもは、罪の意識はとても強いものです。僕は悪い子じやないか、と言われる前から感じる子は、強いものです。ラッセルは自分のことでそれをよく言った。子どもは、おとな以上に道徳的なことについて敏感なんです。私は悪い子かもしれないということとは、やりきれないの。これは子どもというもののすばらしい性質ですね。それと抱き合わせのように、ラッセルは、いいます。僕も大学教授をしていたころによく考えていたけれども、小さい子は、人の前で恥をかかされることにきわめてつらく感じるの。「この子に比べて、あなたは何ですか」とか。おとなは面の皮が厚くなっているからがまんするけれども、小さい子どもであればあるほど、比べて、お前は悪い子だといわれることは、人

前で恥をかかされるということは、おとなが想像できないほどつらいことなの。でも、この二つともやってない？ みんなやってるんじゃないの。罪悪を感じませんか。おとなと違うんですよ、子どもは。

このあと、去年の暮から始まった九歳のなのお子ちゃんと先生の、美しい出会いについて話されます。

なのお子ちゃんは小学校三年生ですが、学校へ行っていない。何か、学校でこわい目にあってから行けなくなってしまったのです。そしてお母さんたちが話しているのをきいて、周郷先生のところへ連れて行ってほしいといつて、先生のところへ来るようになったのです。「周郷先生のところへ行くと、神様はどこにもいる。周郷先生のところへ行って神様の話を聞きたい」というなのお子ちゃんを、先生も「あんない顔をした子はなかな

かいません」といわれます。

“この僕はずい、九歳の子とも恋におちたようになりました。この恋はきれいですよ、この愛は”と……。

そして先生は、なのお子ちゃんの担任の先生（何度もかわって四人目の）と一晩かけて話をなざったり、なのお子ちゃんの家へいらしてなのお子ちゃんと三時間以上話をなざったり、文字にすればそれだけのことも、先生となのお子ちゃんの間には、本当に深い愛による結びつきがあったということが、先生のお話でよくわかります。先生はいつも「子どものくせにとか子どもだから、という言葉は間違っている」といわれましたが、本当になお子ちゃんと対等の立場で話し合われたのです。だからこそなのお子ちゃんは先生の中に神様を見たのだと思います。そして

このことも結局、学校の先生とかお母さんがなお子ちゃんの気持ちを考えずにただ強制的に学校へ行かせようとした、大切な十分の一をダメにしていることなのだと話されます。

十分の一をダメにしちゃいけないということ、わかったんでしようか。十分の九が、文化とか歴史とか社会によってつけ加わってきたものなんだな。その元手であるものは二十万年前にでき上がっている。人間になっていく土台ですよ。土台までダメにしちゃっていいんですか。そして文化的、歴史的である教育というものに、私たちの都合で、生れてきた子どもに見さかいかもなく押しつけているのがいまの教育ですよ。

教育はもっと控え目にしてほしい。教育が多ければ多いほどいいなんてことはいいですよ。教育は悪の方に回っているんで

すから、大学なんかだってもういらないうすよ。こんないっぱいあって……大学があるのは災いですよ。こんな大学がなければ、もっと人間は考えるようになりますよ。こんなところがあるものだから、入ってきて考えたようなふりしているけれども、なにも考えてない。卒業免状もらうだけじゃない？ あんなものがあるからいけない。

ここからの先生の声は、むしろ悲痛と
いった方がふさわしいでしょう。それを
お伝えしたくてそのまま文字にしまし
た。

◆最後に

変な話になってきたけれども、僕が本当に
におうと思っているのは、次の通りで
す。

アーノルド・ローズさんが手紙に書いて

きた。“mobilization of constructive human characteristics”——歴史的な至上命令としての人間的特質を建設的にどういうふうに作り上げていくか——という提案なんですよ。人間には運命的に持っている建設的な精神、建設的なことをやっていると潜在力があるわけ。これが今、ダメになって、これを八〇年代からあとに向かって、人類全体が、人間的ないいものをどういうふうに發揮していくかということを提案している。

いままで僕らが教育だと考えていたことは、次の八〇年代の人類のためには役に立たないものです。だから今の常識、常識のわくをこえた教育が必要なんです。それで、ティヤール・ド・シャルダンの『宇宙の讃歌』という本の中から引いた言葉を出してくるんです。これはね、うっかりただ英語で読んじゃうと何のことだかよくわからない。ティヤール・ド・シャルダンの言

葉はそういう言葉です。

Nothing is precious, save (このセイブは—それ以外は—ということですよ) what is yourself in others (他の人々の中にいるあなた自身) and others in yourself. そしてあなた自身の中にいる他の人々、そのほかには何も貴重な、大事なものはないという、この言葉は、ちょっと聞いたばかりでわかりますか？ あなたたち自身の中に在る他の人、そして今度は、他の人の中にいるあなたたち自身……あとの方からいえば、教師、あるいはある人が、僕でいえばなお子ちゃん、が僕をしたって、僕を神様のようについてきてくれる、そして僕を頼ってきた。そのなお子ちゃんの中にいる僕……貴重だよ、これは。これ、僕は大事にせざるを得ない。

それから、他の人々の中にいるあなた自身、あなた自身だけじゃなくて、他の人の中に自分があるだろうか？ 他の人に影響を

与えているだろう？ お母さんもいるなら、お父さんも、旦那さんも、恋人もいるね。他の人のなかに自分がある影響を与えているね。他の人が自分によって影響をうけているね。死んじゃったお母さんのなかにも僕がいるわけ、僕から影響をうけて心配もしているかもしれない。

そして、自分自身の中にいる他の人がいます。自分は自分だけで生きておれるわけでもないし、自分がいま自分であるのは、他の人から影響をうけて、ここに自分がいるわけです。こういうつながりをもっている。他の人のなかにいる自分、幼稚園の教師でいえば、子どものなかにいる自分、自分一人子どもとが別個にいるわけじゃないんですよ。子どものなかにいる、なんらかの意味で影響を与えている。子どもの愛と命をもたしている自分がある、あるいは破壊しているかもしれない自分がある。

他の人のなかにいる自分。そして自分も

また他の人から影響をうけている。他の人になんかの意味で助けられたりあるいは邪魔されたりしている。自分のなかにいる他の人々、こういう関係だけが貴重なものです。俺は俺でお前はお前で別々でなんの関係もないというんだったら、これは石よりももっと低級なんでね、その人は人間とはいえない。それが愛というつながりなんだ。これ、わかる？ 僕、話してて息が切れるよ。自分だけ、自分だけでいいんですか。自分だけで生きてこれたんですか。いろんな見も知らない他の人も含めて、一人の人間は、その人間の、あなた自身、人間のなかに他の人がいて、自分をもっているわけです。祖先もずっといました。他の人も僕に影響を与えてくれた、いろんな意味で。それは僕に書を与えてくれた人も、僕にとってはそれをプラスにかえる力があるって、感謝すべきことなんだ。そういうふうに、人と人とはつながっているわけでしょう

う。それ以外の、他の人は他の人で、みんな断片的な一人一人別の人で、私は私だというんじゃないくて、人生というのはいくつうつながりになっていくのね。それが愛というものですよ。それから世界でもほとんどそうになっているわけです。酸素だけで宇宙が間に合うわけではないんです。いろんな元素があつて、原子があつて、それがつながつて宇宙の現象が起こっているわけです。ところが、人間はいま fragmentation とか、みんなバラバラで自分のことばかり考へてる。

で、このことは、幼児教育を考へた場合、とっても重要だと思わない？ 子どもたちのなかにいる自分は、貴重な問題だと思わなければ。自分勝手に子どもを道具にしてはいけないわけです。自分のなかにいる子どもたちがいるわけです。そして子どもたちのなかにいる自分が、そこにいます。影響を与えているわけです。それ

が、できることならば建設的な方向にその愛のつながりが働いていってほしいというのが、幼児教育の基本的に重要な問題だと思ひます。

くたびれたなあ………愛ということですよ。

そしてさらに、動物は祖先に忠実にその愛を子孫を生むという行為だけであらわしているけれども、人間はそれだけではいけないのだと強調されます。近ごろは結婚してもかえつて顔がおかしくなる女の人もいるけれど、それはやはりこういう愛のかたちがないからで、それがいなら結婚はしない方がいい、愛というものが本当に濁りなくあれば、結婚しなくたってはるかにいいと強調されます。最後にもう一度、くたびれたなあ、これでやめますね、ああくたびれた。どうもありがとう。これでも僕は幼児教育

の話をしていっているんでね。狭い幼児教育の話をしたんじゃないんだ。幼児教育の問題を、人類の問題として考へていくと、こうなつちゃうんですよ”と結ばれています。私はもう何もつけ加えたり、書いたり、とてもできません。それこそ、私の中の周郷先生を見つめてこれからの人生を生きていこうと思ひます。私にとつても、なお子ちゃんと同じように、周郷先生と神様は一つのような気がするのです。

この講演を文字にするのには、私が実際に伺つていませんので、どうしてもききとりにくい箇所など、毎日新聞社発行『教育の森』五月号掲載の「周郷博士が遺した最後の講演から」を参考にさせて頂きました。また、いつも私の書いたものを通して下さつた周郷先生の代りに、先生のおき理解者山本哲士氏にそれをお願いいたしました。先生と山本先生はまだ知り合われてから日が浅いのですが、お互いに深い理解をもたれたようので、その意味でも、もつともつといつまでも、先生に生きて頂きたかつたと思ひます。